

# 九州大学書物蒐集史：蔵書の基層になった狩野亨吉、福岡図書館、欧州の学者、九州の先賢らの旧蔵書

山根，泰志  
九州大学附属図書館

<https://hdl.handle.net/2324/7183083>

---

出版情報：Cultural story of Nishinohon. 511, pp.31-33, 2024-07-01. 西日本文化協会  
バージョン：  
権利関係：



## 九州大学書物蒐集史

山根泰志

蔵書の基層になった狩野亨吉、福岡図書館、欧州の学者、九州の先賢らの旧蔵書

## 書物収蔵機関としての九州大学

九州大学は、明治四十四年（一九一）の九州帝国大学創立以来、長きにわたり、膨大な書物・記録資料を蒐集してきた。明治維新後の混乱や戦災などにより、多くの書物・記録資料が失われた福岡において、福岡藩校養生館（西洋医学の医育機関）をはじめとする前身機関が蒐集した書物をも継承し、現在に伝えている九州大学の書物収蔵機関としての意義は大きい。

近年、九州大学附属図書館が発行した『知をつむぐ―九州大学の書物たち―』（二〇一九年初版、二〇二三年第二版）は、これまで九州大学が蒐集してきた書物・記録資料の中に含まれる、多様なユニークなコレクションを紹介するものである。とくに分野や地域ごとに主要な資料群を紹介した「文庫・コレクション一覧」には、受入部局や受入年も記載しており、どの部局がどのようなコレクションをいつ受入したかが把握できるようになって

いる。「知をつむぐ」はウェブでも公開しているため、ご関心のある方はぜひご覧いただきたいが、本稿では、近年の調査による知見を踏まえつつ、九州大学が戦前までにどのように書物・記録資料を蒐集し、蔵書の基盤を構築してきたかを概観してみたい。

## 狩野亨吉からもたらされた書物

九州帝国大学に附属図書館が創設される以前から存在した医学部・工学部・農学部においては、各教室で書物が蒐集・管理されたが、とりわけ医学部草創期の教授たちは、それぞれの学問の発展史を理解することを重視し、最新の文献だけではなく、和漢洋の古典文献を積極的に蒐集していた。明治末から大正期に、眼科教室初代教授大西克知が、教室を整備するにあたり、親交があった東京の狩野亨吉（近代日本を代表する思想家・教育家）より大量の書物を購入した。大西は、和漢の古医書だけでなく、類書・史書などの



『三才図会』／眼科教室旧蔵狩野本 医学図書館所蔵  
中国明代に編纂された絵入りの類書（今日の百科事典に類する）で、寺島良安『和漢三才図会』のモデルとなった。

大部な参考図書類をも購入するなど、本格的かつ総合的な図書室の創設を志向し、その規模は他の教室を圧倒した。同じく工学部数学物理学教室教授桑木或雄も、戸畑铸件会社の鮎川義介の資金をもとに、親交があった狩野より数学天文書を大正期に購入し、それはのちに桑木文庫と称せられる科学史コレクションの基盤となった。同じ時期に大学本部も朝鮮本・人名録・書目類を購入し、それはのちに法文学部、附属図書館に移管され（狩野文庫）、当代随一の本の目利きである狩野

が蒐集ないし斡旋したということもあり、書店が少ない福岡では得難い貴重な文献がこのとき、九州大学に多数もたらされた。

## 法文学部・附属図書館の書物蒐集

大正十三年（一九二四）に創設された法文学部では、文部省の在外研究員制度により、欧州に多くの教官を留学させ、第一次大戦後のマルクの暴落に乗じて舶来の書物を大量に購入していた。この際もたらされたのが、ライプツィヒ大学教授パウ・バルト、ベルリン大学教授カール・シュトゥンプ、オーストリアの政治家・経済学者グスタフ・グロース、ベルン大学総長フィリップ・ロートマールの諸文庫であった。

翌年、附属図書館本館が竣工・開館し、第二代附属図書館長となった法文学部西洋史講座教授長壽吉を中心に、蔵書の構築が開始された。同年、明治から大正期に出雲大社教福岡分院に設置されていた私立福岡図書館の旧蔵書を中心とする約一万冊の書物が、分院長の廣瀬家より廣瀬文庫として寄託された。福岡図書館は、旧福岡藩士や各神社文庫等の寄贈・寄託により、播磨期の日本の公共図書館の中でも最大規模を誇る七万冊の蔵書を擁し、明治期福岡における書物収蔵拠点としての機能を担った。国学者江藤正澄蒐集

の古器物の展示、農業参考館の設置、筑紫化蝶会（古銭）や八雲会（和歌）の開催など、多様な社会教育事業を展開したが、館主廣瀬玄銀の死を契機として閉館した。福岡における近代図書館の原点といふべき蔵書が、附属図書館の基盤となったのである。廣瀬文庫は、寄託期間の延長を経て戦後に売買契約が成立し、九州大学の所有に帰した。蔵書構成は多岐にわたるが、なかでも九州・福岡の郷土資料に特色がある。



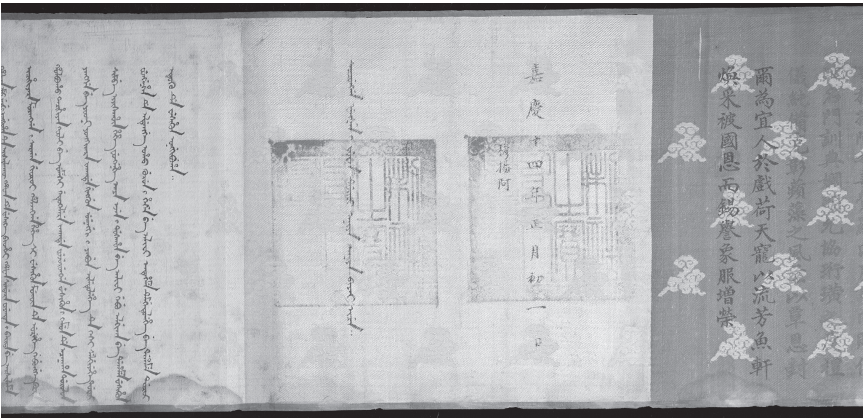
『筑前名所図会』／廣瀬文庫 中央図書館所蔵  
奥村玉蘭によって著された福岡を代表する地誌であり、廣瀬文庫本は福岡市博物館所蔵稿本（奥村家本）より遡る稿本。この宗像郡「増福院・怨霊出現図」も奥村家本と描写が大きく異なる。

昭和初期には、福岡出身の天文学者寺尾壽が、引退後に伊豆伊東の音無川畔の閑居で蒐集した国語学・国文学関係の旧蔵書（音無文庫）と、東京帝国大学国史学講座教授の萩野由之の旧蔵書（萩野文庫）が購入された。いずれも九州では得難い江戸期国学者旧蔵の稀覯書が多数含まれているが、図書館の基盤となるべき基本文献が揃っていたことも大きかった。

欧州・日本を代表する学者の蔵書が蒐集される一方、九州・福岡を支えた先賢たちの蔵書も蒐集された。福岡の郷土史家江島茂逸および江藤正澄の自筆稿本類（江島文庫・江藤正澄関係資料）のほか、八女の樋口和堂、長崎針尾島の楠本碩水とその親戚・親友の近藤畏斎、瀬高の西田縮堂、福岡の宗道遙ら、漢学者の旧蔵書が相次いで収蔵され（樋口文庫・碩水文庫・近藤文庫・西田文庫・逍遙文庫）、九州大学の郷土資料・漢籍群の基盤を成した。

## 古文書・記録資料の蒐集

九州大学における古文書・記録資料の蒐集は、記録に残されている限り、大正十三年（一九二四）、東京の古書店に買い取られそうになった貝原益軒書簡を含む福岡藩儒竹田家歴代の書簡を、福岡県立図書館と折半して購入したことから始まる。その後、附属



奉天詰命 嘉慶 14 年 (1809) / 旧玉泉館古文書 浦瀬七太郎 (白雨) 教授寄贈 記録資料館所蔵  
清朝の外戚穆揚阿 (東太后の父) とその妻に対する辞令文書で、五色に織り分けた錦に、  
左側から満文 (六色)、右側から漢文 (五色) で全く同一の内容を記す。それぞれの文末が  
交わる中央に満漢合璧の玉璽が押印されている。

図書館、工学部・農学部・法文学部各教室により個別に蒐集されていったが、昭和九年(一九三三)、九州全般にわたる文化史的な史料の蒐集と研究を究極的な目的においた九州文化史研究所(現附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門)が設置された。九州文化史研究所では、法文学部法制史講座教授

であった金田平一郎を中心に、戦時下に至るまで史料蒐集活動が続けられ、その結果、福岡市内を始め九州各地の空襲により失われた史料の多くが、写本として残されて後世に伝わることとなった。

九州大学教養部の前身である旧制福岡高等学校では、学生たちが実物に触れることで歴史の何たるかを考えることができるように、玉泉大梁教授により歴史地理参考室(玉泉館)が設置された。教員や学生以外にも、県内の郷土史家や蒐集家などさまざまな有志により考古資料(現在、九州大学総合研究博物館所蔵)や古文書が寄贈されたため、多種多様なコレクションが形成された。

### コレクションの再発見と再構築

書物を蒐集するにあたり、書物収蔵機関や蒐集家が集まり、古書店も多い東京に比べると九州は地理的に不利であったが、九州大学には、大学の基盤を築いた先人たちの長期的視野に立った高い見識と九州・福岡という地域との結びつきにより、貴重かつ良質なコレクションが蓄積され、辛くも戦災を免れて戦後の新制九州大学に継承された。しかしながら、長い年月を経て由来が忘れられ、コレクションの中には、書庫の中で分散し、埋没していったものが少なくなかった。

伊都地区へのキャンパス移転を主な契機として、蔵書の調査や整理が行われたことで、埋もれていたコレクションが再発見され、本来のまとまりを可能な限り復元するなど、由来や価値に基づいたコレクションの再構築が進められた。附属図書館ウェブサイト上の「貴重資料デジタルアーカイブ」では、九州大学が所蔵する文庫・文書群などの目録データを収録し、一部の資料についてはデジタル画像を公開しているが、これまで再発見・再構築されたコレクションを可視化させることも企図している。

デジタル技術の発展などにより、古い書物の中に眠っていた多くの情報が、教育・研究だけでなく、さまざまな用途で活用されつつあるが、書物の可能性を信じ、貴重なコレクションを今のわれわれに残してくれた先人たちの卓見を、そこに窺うことができるだろう。

#### 〈主要参考文献〉

- 『九州大学百年史』第六巻部局史編Ⅲ 二八編附属図書館、九州大学、二〇一七
- ・和仁かや・梶嶋政司・中川晃一「金田平一郎と九州大学附属図書館」二〇一八
- ・和仁かや・梶嶋政司・山根泰志・宮嶋舞美「金田平一郎旧蔵書」『九州大学附属図書館研究開発室年報』二〇二〇/二〇二一、二〇二二

やまね やすし・九州大学附属図書館